

# 2017年度iEARN国際会議報告 —iEARNモロッコ国際会議の内容と意義—

A REPORT OF 2017 iEARN CONFERENCE  
—The Contents and Meaning of The Conference in Morocco 2017—

清水 和久 (人間科学部こども学科教授)  
Kazuhisa SHIMIZU (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

## 〈要旨〉

iEARN国際会議は、毎年開催され、世界中から多くの教育者を集めている。iEARNの組織の成り立ちはアメリカとソ連の冷戦時代にお互いを知らないことからくる疑心暗鬼から戦争に発展することを防ぎたいという思いから始まっている。次世代を担う若者同士がもっと交流できるプログラムが必要であると考えられるようになった。iEARNでは様々な国際プロジェクトがあり、世界の教育者がICTを活用することでそれを成し遂げてきた。

今回の国際会議では、世界中の教育者が一堂に集まり、実施してきたプロジェクトを報告し、新たな参加者を募るとともに、お互いのネットワークを築く会である。同時にユース会議も実施されて次世代を担う、中高生が互いに知り合う機会にもなった。

本論文では、全大会の様子や筆者の参加した分科会を中心にその内容を伝える。今後日本においても取り組みやすいプロジェクトを提案する。

## 〈キーワード〉

国際協働学習、国際会議、iEARN、JERAN

## 1 はじめに

2017年7月17日から22日まで第23回iEARN国際会議及び第20回ユース会議がモロッコのマラケッシュにおいて開催された。このiEARN (International Education and Resource Network) の国際会議は日本では2003年に淡路島で開催されている。それ以来筆者は、今回も含め7回この国際会議に参加している。今回はiEARNのJAPANセンターであるNPO法人JEARN (日本名グローバルプロジェクト推進機構) の活動も含めて活動内容を紹介し、学校教育との関係においてこの組織の持っているポテンシャルについて分析し、学校教育における総合的な学習の時間や英語活動での活用を考えてみたい。

## 2 iEARNの歴史

### 2-1 はじまり

アメリカのPeter Copen氏が、アメリカとソ連が冷戦下で、相互の国民が不信感を抱いている事実を嘆き、互いが分かり合えるために若者同士をつなごうと、Copen Family Foundationを設立し、1988年に、モ

スクワとニューヨーク州の12校ずつの学校をつないだ Telecommunication project をスタートさせた。このプロジェクトには、ロシア科学アカデミー (USSR Academy of Science) とニューヨーク市教育省 (New York State Education Department) のサポートがあった。両者の学校間では、社会的政治的な問題について討論がなされたり、互いの国の著名な作家の本を読み合ったりなど異文化理解が進んだ。<sup>(1)</sup>

1990年には参加国が9カ国に広がった。そして1994年に第1回の年次国際会議がアルゼンチンで開かれるまでになった。草の根レベルで教育者同士、児童生徒同士を結び付け、生の情報をやり取りして学習することで、お互いの異文化理解を急速に深めることができる機会となっている。

### 2-2 iEARN年次国際会議の履歴

以下開催番号、年次、開催国を示す。

第1回1994年：アルゼンチン、第2回1995年：オーストラリア、第3回1996年：ハンガリー、第4回1997年：スペイン、第5回1998年：アメリカ、第6回1999年：プエルト

ルコ、第7回2000年：中国、第8回2001年：南アフリカ共和国、第9回2002年：ロシア、第10回2003年：日本、第11回2004年：スロバキア、第12回2005年：セネガル、第13回2006年：オランダ、第14回2007年：エジプト、第15回2008年：ウズベキスタン、第16回2009年：モロッコ、第17回2010年：カナダ、第18回2011年：台湾、第19回2012年VCで開催、第20回2013年：カタール、第21回2014年：アルゼンチン、第22回：2015年ブラジル、第23回：2017年：モロッコ。2012年は、開催地が決まらずネット上で開催されたという意味でVC（ヴァーチャル）となっている。また、2016年はインドでの開催が予定されていたが、ラマダンの月と重なり参加者の減少で中止となった。上記の国際会議の内、筆者は、2003年の日本での開催以来、エジプト、カナダ、台湾、カタール、ブラジル、そして今回のモロッコと7回参加している。

### 3 2017年度のモロッコでの国際会議の概要

#### 3-1 会議の概要

2017年の年次国際会議は、中高生が参加するユースサミットとともにモロッコのマラケシュで、7月17日から7月22日まで開催された。43カ国から、約210名の教育者と90名の若者が参加。5日間の開催期間で、全体会での発表が9本、分科会（ワークショップも含む）が65本、ユースサミットで14回のセッションが実施された。分科会のプレゼンターは、各国で様々なiEARNプロジェクトを行っている教育者で、ICTを活用しておこなってきたプロジェクトの紹介を対話型のワークショップをすることで紹介していた。本報告では、筆者が参加した会の中から、全体会議から2本、分科会から6本、ユース会議から1本を選んでその内容を紹介する。



図1 第23回iEARN国際会議オープニングの様子

#### 3-2 全体会議の事例

全体会議は、各日の午前に行われ、合計で9本の講演が行われた。私が印象的であったのは、1日目の全体会議

の講演の2本目で、Mohamed Sidibay氏の「The power of quality education in changing lives and the danger of a mind kept in captivity」（人生を変える教育の力ととどまりたいとする心の危険性）と4日目の1本目の講演 Cynthia English氏の「Technology and Humanity: Global Friendship can change Future」（技術と人類：未来を変え地球規模の友情）である。以下詳細を述べる。

#### 3-2-1 人生を変える教育の力ととどまりたいとする心の危険性

発表者のMohamed氏は、シエラレオネ共和国出身である。この国では1991年から2002年までダイヤモンド鉱山を巡り内戦が起きており、彼も幼少期をここで過ごすこととなった。内戦に巻き込まれ彼の家族は殺され、少年兵となることを強いられた。10歳にして人を殺すか、殺されるかの2つの選択肢しか残されていなかった。内戦が終わって2007年の14歳の時、偶然にも難民としてアメリカに渡ることができた。彼はそこで教育を受ける機会に恵まれ2015年にはジョージワシントン大学を卒業し、4か国語を話すまでになった。現在は人権活動家としてユースの代表として活躍するまでになった。

もし彼が、そのままシエラレオネにいれば教育を受ける機会もなく、現在の姿はなかったはずである。教育を受ける機会を得ることで未来に向かって限りない可能性が開けてくることが分かる事例であった。発表後は会場からも惜しみない拍手が響いた。

#### 3-2-2 未来を変える地球規模の友情

Global scribe (GS) の創始者であるCynthia English氏は作家である。彼女は、世界の子どもたちが作家として、様々な記事を投稿できるサイトを作成し、どの国で何件の投稿があったかをリアルタイムで地図上に提示できるようにしている。8歳から25歳の子供達に参加でき、教室やクラブ単位、個人でも参加することができるようになっている。

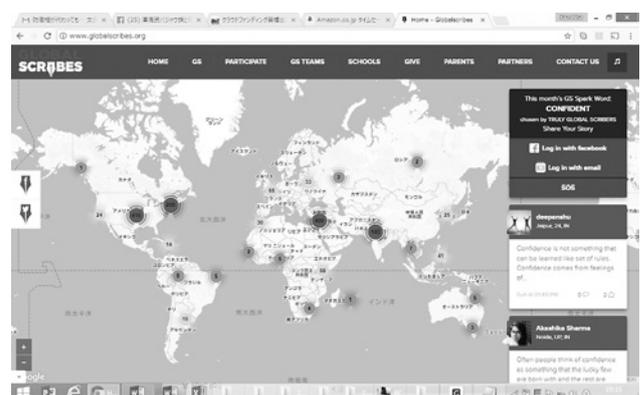


図2 GLOBAL SCRIBE 投稿記事のマップ

参加者には4つのステップがあり、第1のステップとして月1回の投稿、第2のステップとしてビデオの投稿がある。さらに第3のステップとして半年ごとに3分から7分程度の短編映画の投稿、第4のステップとして自分が興味のあるチームに分かれ、作業を続けることである。

このGSの一番の大きな特徴は、書いた記事の善し悪しの評価はないということである。誰もが互の記事を尊重し、互いの文化を認めあうことで、若者間のコミュニケーションを広げることを目的としている。

今回日本から参加した高校生が、このプロジェクトの日本人の登録第1号となり、帰国後に「武士道」などについて投稿し記載されていた。まさに世界の中高生が作家となり、投稿する仕組みなので、生きた英語の勉強となる。このような活動が学校の中に取り入れられると英語の授業が活性化するであろう。

### 3-3 分科会の事例

全部で65の分科会があった。同時に5つの分科会が同時開催されるため、筆者が参加した6本の分科会の内容を紹介する。

#### 3-3-1 分科会 NO.5 (3か国合同)

“Finding Partners for Resources and Support of professional development”=「教材化のための交流相手の探し方と専門的能力開発のための支援」

発表者：Cathy Healy (USA) ジャーナリスト (他3人)

Cathy氏自身はジャーナリストであり、国際交流のボランティアとして30年ほどの実績がある。交流相手を、国内および国外で見つけ、どのような交流をしたかの事例を紹介していた。発表者は他に3人おり、アメリカ1名(iEARN USA)、コスタリカ1名、コロンビア1名であった。コスタリカとコロンビアの発表者は小学校教員であり、Guardians of Birds(鳥の守護者)プロジェクトの紹介をおこなった。このプロジェクトは南米の環境に関心を持ってもらうために、コロンビアとコスタリカの小学校の先生がアメリカの小学校と「鳥」を題材として交流を行ったものである。TV会議で鳥になったつもりでコスプレを着て感想を述べ合うなどの活動を紹介していた。iEARNのコラボレーションセンター(交流フォーラム)などを利用して2年間にわたって交流したことの報告であった。

#### 3-3-2 分科会NO.10(台湾)

“Possibilities for intercultural exchange: Taiwan experience” 「国際交流の可能性：台湾の経験より」

4人の発表者

1) Cheng-chan Chen: 中学校教諭 PHD

2) Tsui-Chien-Wu: 幼稚園教諭 幼児教育の修士

3) Ta-Shia Bau: 高校英語教諭 外国語教育の修士

4) Chi-Chen Wu: 高校英語教師

iEARNのプロジェクトに参加した実践紹介

- 1) 2015年に行われた日本でおこなわれた国際ショナルユースサミットに参加。これを機会として、日本の名古屋の男子高校とTeddy Bearプロジェクトを実施した。このプロジェクトはたいへん取り組みやすく人気がある。互いの国の大使として動物のぬいぐるみを交換し、外国から来たぬいぐるみの視点からデジカメで撮ったり、日記に書いたりして、記録、最終的にはそのぬいぐるみが母国に帰ることで異文化理解を行えるプロジェクトである。導入のプロジェクトとしてはとてもやりやすいものである。開始当初の1年目は、台湾の高校の1クラスだけの参加であったが日本の高校と交流し、ビデオの交換も行った。どちらの高校もシャイな高校生が多かったが、Skyp meeting 2回実施(1回目は日常生活、2回目は自然災害)について行うことでお互いの理解を深めることができた。

2年目は交流を深めるために日本と台湾の双方で交流クラスを増やした。テーマも広げ、食べ物の紹介や、カードの交換を実際に郵便で行った。正月の祝賀の方法なども祝い方が違って楽しめたようである。英語を使っている詳細な部分までの交流は難しいが、正月のカードの交換などで互いの文化を十分理解することができた。

- 2) Tsui-Chien-Wu氏の発表(幼稚園の教員)

カナダの小学校とのTeddy Bearプロジェクトでの交流 台湾の正月のカードの送付し異文化理解を行うことができた。なかでも台湾の児童の100歳のおばあちゃんがベアーに着せる服を作ってくれるなど児童の家族を巻き込んでの活動となった。また休み期間中に実際に、カナダの教員が台湾を訪問する機会もあり、小さい子供たちによっては、実際にカナダの先生と会う機会にもなり、より身近に感じる事ができたようである。

- 3) Ta-Shia-Bau Chi-Chen Wu(高校英語教師)

日本の名古屋の豊橋高校との交流で壁画を共同で描くアートマイルプロジェクトの紹介。TV会議を6回実施。

日本の高校は修学旅行で実際に台湾を訪問する予定があり、事前の交流として台湾での交流相手を探していたようである。台湾の高校生にとっても外国である日本の高校生と英語で会話するのはとても興奮したと述べている。ホリデーカードエクステンジで英語で書いてあるカードを実際もらうことでとても喜んだ。アートマイルでは美術の教員にも手伝ってもらい、実際に日本の高校生が台湾に修学旅行で訪問してくれた時に完成した壁画を披露することができた。

台湾からは3件の発表があり、そのうち2件は日本との交流の発表であった。今後とも台湾とは多くの国際交流を実施できると感じた。

### 3-3-3 分科会NO.14 (日本の高校生)

“Japanese culture and Okinawa culture”

「日本の文化と沖縄の文化」

発表者：Hiroshi Ueno

日本の沖縄の尚学館高校の教員と4人の高校生の発表である。この学校は私立の学校で、校内にiEARN部があり、毎年国際会議に参加している。特に引率の上野氏はこの部活動の創設者である。今回の高校生のプレゼン内容は、体育の授業として取り組んでいる沖縄空手の説明と日本文化の習字と折り紙の説明と実演であった。習字は外国の教師には人気が高く、お手本をもとに書くのであるが、文字を絵画的にとらえるためか何度も塗り重ねていたことが印象的であった。高校生が英語で堂々と日本文化について説明し実演したことは発表した高校生にとって大変な自信となったと感じた。このような機会は本当に貴重である。

### 3-3-4 分科会NO.26 (アメリカ)

“Social and Emotional Skills + Creative Expression = Winning Learning” 「社会的情緒的スキルと創造的表現活動は学習効果を高める」

発表者 Diana Feldman (USA)

Andrea Aranguren (Argentina)

ニューヨークのENACT (<http://enact.org>) という団体が展開するドラマセラピーとクリエイティブシアターのワークショップ。CASEL (Collaborative Academic Socio Emotional Learning: <http://www.casel.org>) という団体は、このようなすすめ方が学力向上にもつながるといって、全米で展開するようになったが、ENACTもその一つである。「生徒が教師のことを聞かない」状況のドラマが演じられた。登校してきても宿題を出さず、教師の言うことを聞かない生徒に対して、教師が怒り、最終的に生徒を教室から追い出した。この扱いを巡って参加者が意見を述べるのである。そのあとでグループごとに、参加者が教室や学校をめぐる問題を考え、教師が直面する問題をロールプレーで演技した。そして、教師の行動の可否を参加者が論議するのである。

### 3-3-5 分科会NO.33 (ブラジル)

Teddy bear project

Presenter Rose Gimenes (ブラジル)

台湾、ペルー、オーストラリアの3カ国と同時にプロジェクトを実施したブラジルの先生の発表。ブラジルは公用

語がポルトガル語であるが、外国に友達を持てることから、熱心に英語に取り組むようになったと報告があった。特に台湾とはTV会議なども実施し、台湾の小学生が自己紹介を英語で行っているビデオを見せていた。

ブラジルの交流相手の台湾の教員が、このモロッコの会議にも実際に来ており、ブラジルからだけでなく、台湾の児童の様子も説明してくれた。台湾から送られたテディベアには女の子の着替え用の洋服やチャイニーズヨーヨーなども一緒につけられていたが、これは、保護者に協力して作ってもらったことを述べていた。

このプロジェクトは小学生には手ごろであり、一度に複数の国とも交流が可能である。

### 3-3-6 分科会NO.43 (アメリカ)

“International Book Club and Online Resources”

「国際ブッククラブおよびオンライン・リソース」

W. Marshall, Fay Asfour Stump (USA) / Khalid Fethi (Morocco)

北米ではよく知られているラーニング・サークルを読書活動に応用しながら、子どもたちの意欲をひきだそうとするものである。このプロジェクトのゴールは、1) グローバルリテラシーを身に着けること、2) 読書を通して国連のSDGs (国連持続発展目標) に関する理解者を増やすこと、3) 読書の感想をフォーラムで交換する事、4) SDGsについて述べられている多文化の文学や本を紹介することの4つのである。

multicultural booksを読書の対象にする理由についてFay氏は6つの理由を挙げている。

- 1) その国に読者をいざなう。
- 2) 人類共通の感情を味わうことができる。
- 3) ステレオタイプの考え方をやめる。
- 4) 世界の様々な年齢の人の考え方を学べる。
- 5) 寛容さと尊敬を学べる。
- 6) 文化的遺産としての誇りを学べる。

実際の活動では、本に関する質問を児童・生徒がつくったり、印象に残った文章を紹介したり、皆に伝えるようなポスターをつくるようにすすめられる。

ワークショップでは、まず、自分の生き方に影響を与えた本をカードに書き、ベアになって紹介しあうアイスブレーキングがあった。そのあとそれらをSDGsの項目にあてはめるように求められた。短時間でいくつものオンライン・リソースが紹介され、また典型的な書籍も学齢別にあげられた。ここでいうオンライン・リソースとはネット上で公開されている物語である。そこで提示されていたものは、“Global Read Aloud” “Oxford Owl” “Story Line Online” “Kid World Citizen” “ALA’s Book Club Central”

“International Children’s Digital Library” “Children’s Books Online by the Rosetta Project” などがあり、ほとんどが無料で公開されている。

今後の考えられる活動として、同じ本を読むか、テーマが同じ本を読み、フォーラムに感想を書き込む、その上でTV会議を実施し話し合うというものであった。内容的には面白いのであるが、英語でのかなり高度な議論が必要となってくるため、日本の子供には参加は難しいと感じた。

### 3-4 ユース会議

iEARN国際会議はもともと教師が集まる国際会議であったが、同時に生徒の会議も並行して開催されるようになった経緯がある。今回でユース会議は20回目となる。実際に次世代を担う若者同士を合わせることは特に重要である。

午前は大人と同じ全体会議に出席するが、午後からはユースだけの別メニューが実施された。5日目のユース会議では、日本人が実施するNDYS（世界防災こども会議）と大正琴プロジェクトにおいて、防災意識を高めるためのポスターの作成と、災害が起こった時にどのように対処すればいいかをタブレットを使ってまとめる場面があり、iPadのアプリであるE-VOLVOX（鈴木教育ソフト）を使用し考えを構造化して表現してもらった。多言語に対応しているアプリであれば、言語を英語にするだけでメニューも英語に変えることができるのでモロッコの高校生も簡単に使うことができた。またこのアプリはメニューもほとんどアイコン化されているので感覚的に使うことができる。

このユースのワークショップでは、防災教育を考えるうえで、津波や自信などの災害について事前、時中、事後でどのようなことに注意をすればいいかを考えてもらい、ケースに分けて考えてもらう活動を実施した。筆者がこのワークショップを担当し使い方の説明も含めて1時間余りで完成した。モロッコの高校生は、現地語に加え、アラビア語、フランス語（小学校3年から学習）、英語（中学校3年



4 E-VOLVOXで考えをまとめるモロッコの高校生

から学習)をマスターしている生徒が多く、コミュニケーション能力も高いと感じた。自然災害のサンプルとして地震が起きた場合を提示したが、実際の高校生は、津波や火山の噴火、山火事などの例で考えていた。タブレットなどがあれば、操作性はあまり気にしなくても、感覚的な操作で、プレゼンなどもまとめることができると感じた。

## 4 まとめ

年1回のiEARNの会議には、世界中から教師が集まってくる。お金と時間をかけて世界と繋がりたいと思う教育者が集まってくるのである。そこでは参加しているプロジェクトの実践報告や、プロジェクトの翌年の参加者を募集することになる。日ごろはネット上でしか会えない教育者同士が、実際に顔を合わせる貴重な場でもある。日本ではまだ夏季休暇にはいない時期で、現職の教員が参加するのは難しい時期である。筆者のような直接参加できるチャンスのある大学教員が日本の教育者と外国の教育者の中を取り持つことで国内の国際教育を活性化させる必要がある。

iEARNの組織に入るにはまずiEARNの日本センターにあたるJEARN<sup>(2)</sup>（日本名：グローバルプロジェクト推進機構）に加入しなければならないことは前に述べたが、このiEARNの入り口であるJEARNの活動をもっと普及させていくことでより多くの教員、そしてその後ろにつながる児童・生徒を国際協働学習の体験へといざなうことができるはずである。

次の学習指導要領の柱の「主体的、対話的で深い学び」の実現は、実際に日本の児童生徒を海外の同世代の子供達とつなげることで、実現できる面があると考えられる。

主体的な学びには、目的意識・相手意識が必要であるが、実在する外国の同世代の児童・生徒の存在を意識させるプロジェクトに関わることで、共同で取り組む目的、相手意識を持たせられる。また対話的な学びでは、ICT活用と英語力が必要となってくる。そして国連の到達目標であるSDGsの達成を目指すことで、日本だけではなく世界といった視点から物事を考えられる深い学びにつながると考える。

今回参加してみて、台湾やブラジルの実践報告で出されていたTeddy Bearプロジェクトに改めて魅力を感じた。筆者はこのプロジェクトは小学生向きだと考えていたが、台湾では日本の高校生との交流のとりかかりとして使われており、そこから自然災害の話題に昇華している。あくまでもこのプロジェクトをきっかけとしてすることで、より深い交流が可能になっている。また、このプロジェクトはコンテンツをつくってしまえば複数の学校との交流にも使えることもわかった。今後はこの会議で知り合いになった

海外の教育者と連絡を取って“Teddy Bearプロジェクト”で日本の地元の小学校と海外の小学校をつなげていきたいと考える。小学校の英語の教科化も踏まえて、海外とつながることで英語の子供達に予感を感じさせたい。

---

## 注

- (1) <https://iearn.org/about/history>  
2017.08.09
- (2) <http://www.jearn.jp/japan/index.html>  
2017.08.09